

第 8 回 「自分の幸せだけでいいのか (二)」

共同体のルール「礼」。

講義 加地伸行

「論語指導士」養成講座 第 8 回講義

論語教育普及機構 代表 加地伸行

今回は「自分の幸せだけでいいのか」第二回のお話をします。

前回は、人間が集まって生きていくその基本となるのは「共同体」であるという、古い時代のお話を致しました。この共同体的生活というのは、全世界どこの地域でも始まったものでした。

ところが、中国を含めたこの東北アジアでは、この共同体を徹底的に深めていきました。深めた結果、前回お話しした通り、儒教文化圏では共同体の意識が強い状態となったわけです。

他の地域とどこがどう違うのかを少しお話しします。

これは中国の儒教がそう言っていたわけではなく、だんだんと考え方を深めていって、出来上がった思想です。

それは何であるかというと、「^{れい}礼」。

礼儀作法の「礼」です。「礼」ということばで共同体のルールを示すようになっていきました。

【共同体のルール「礼」】

「礼」、みなさんがご承知のお辞儀をするのも「礼」です。

「さようなら」と挨拶するのも「礼」です。

こういう挨拶をも含めたあらゆる形の、人間の共同生活におけるルールというものを「礼」ということばで表現していました。

その「礼」を作っていくならば、「礼」の中に基準が必要です。そこで儒教ではその基準を深めていったのです。

【「礼」の基準、博愛】

第一は何であるか。「誰を愛することになるのか」、これが問題になります。

例えば、キリスト教という宗教社会では、愛するという場合に「^{はくあい}博愛」ということばを使い

ます。博く愛する、みんな同じように愛しましょう、といった意味なんでしょう。

そういう「博愛」ということばが今日の日本でも使われることが多い。人々をある意味、平等に愛するということです。そのような「博愛」の思想は、儒教の中にはありません。

しかし「博愛」ということばはあります。

では、儒教で言う「博愛」と、キリスト教社会の「博愛」とではどこが違うのか。

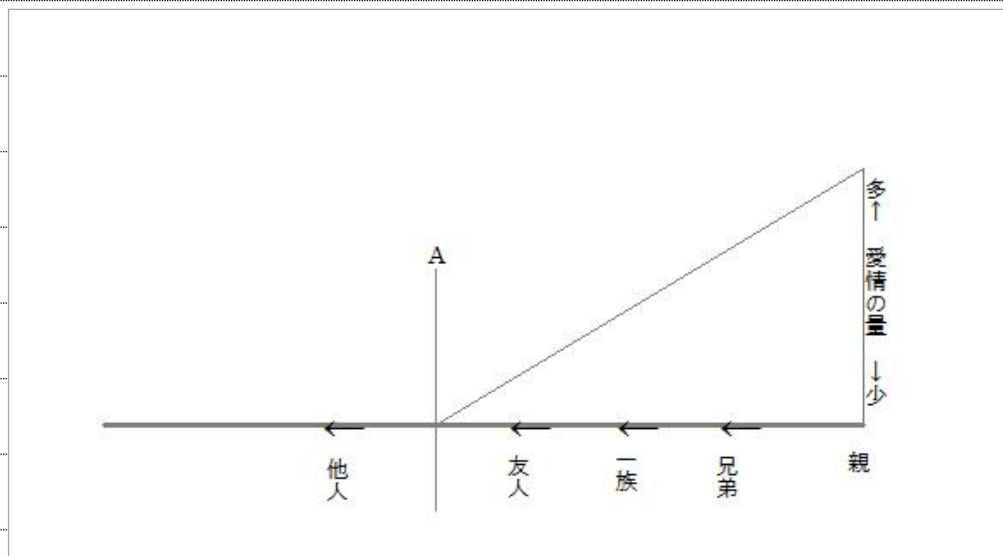
そこに大きな問題が現れてきます。

儒教は、人間関係を重視します。

キリスト教社会では、人間関係を飛び越えて、民族も飛び越えて、他者それぞれに対します。

しかし、儒教はそのような考え方は全く取らない。

まず自分がいて、自分からの距離を考えます。



この図は、左に行くにしたがって、自分との関係が遠ざかっていくことを表しています。

さて、血縁の中で自分にとって一番近い人を愛しなさい、と言っています。

血縁の状態が遠くなっていくにつれ、愛情の量が減っていきます。

あるポイントに来ると、もう愛する必要はなくなります。

自分に一番近い人を最も愛するわけです。それは「親」です。「親」に対しては愛情量が一番多い。「兄弟」は「親」よりも遠いので、「親」に対するよりも愛情が少ない。

親戚「一族」はさらに遠いので、さらに少ない。

血縁を超えて、親しい「友人」に対しても愛情はあります。

しかしずっと遠くなって「他人」。ここ（A）線から先、これは関係ありません。他人です。

まず、知っているところまで、（A線まで）愛情を持ちなさい。知らない他人に愛情を持つ方がおかしいというのが儒教です。しかし（A線の位置を左に変えていく）愛情を広げていく努力はしましょうとっています。愛情はA線までは絶対に必要。それ以上に広げていく努力はしましょう、これが儒教の「博愛」です。

キリスト教のように、始めから平均的に愛を広く捧げるのではなくて、親からA線までは努力して絶対的なものとし、そこから先は少しずつ広げていきましょう。そういうことが儒教の「博愛」。

愛することの最高は「親」である。

血縁が薄くなるにつれ、愛情も少なくなる。実感があります。

そして次の大変なことを生んできます。

愛情が最高ですから、悲しみもそれに比例します。

一番の悲しみは「親」の不幸です。不孝の極致は「死」です。親が亡くなった時の悲しみが最高の悲しみです。縁が遠くなっていくにつれ、悲しみの量も減っていきます。

A線から先は、亡くなくても別に悲しまないわけです。これは現実感があります。そのことを儒教は言っています。

【最高位の「礼」】

重要なことを言います。「礼」ですから、社会的なルールです。

親から始まっていく愛、逆転して悲しみ。

「親」の死に対する悲しみを表現する「礼」が葬儀です。「親」に対する「葬儀」をもって、最高の「礼」を尽くすということになる。

以下、関係が遠くなれば、悲しみも減っていきますから、葬儀も簡略になっていきます。

そして縁のない関係のない人の葬儀には、喪服を着て参列するのはむしろ失礼になる。平服でいいのです。それが共同体のルール。

「礼」に関して、非常に詳しく様々なものを作っていったのが「儒教」です。

それでは具体的なことばで考えていきましょう。

しいわ これ みちび どう まつりごと もつ これ ととの けい もつ
「子曰く、之を道（導）くに政を以てし、之を斉うるに刑を以てすれば、

たみまぬか はじな これ みちび とく もつ これ ととの れい もつ
民免れて恥無し。之を道くに徳を以てし、之を斉うるに礼を以てすれば、

はじあ か ただ
恥有りて且つ格（正）し」（為政第二）

少し長い文章ですけれども、今、私が説明しましたようなことをここで表現しているわけです。

それでは文の解釈です。

孔子がおっしゃった。「民」民衆。「道く」は導く。古代では「道」という文字を、「指導」の

「導」の意味にも使っていました。人々を指導するとき、行政を行うときに、の意味です。

そのときに「政を以てす」。政事一般の話ではなく、具体的な話をしています。普通は法律制度という意味に解釈します。

「之を斉うるに」これは治安です。治安維持のために刑罰を使う。ここは近代・現代社会のような感じですが。法制度と刑罰とで国家の秩序を守っている。

しかし、それはだめだと言っています。

「民免れて」人々は法律や制度、刑罰に引っかけられないように逃れて。「恥無し」法律に触れないなら何をしてもいい、と恥がない。法律に引っかけりさえしなければ、大丈夫じゃないか、何でもありなんだ、そういうことになると言っています。

法家思想に対する批判です。確かにそういう面は否定できないと思います。

今日では法秩序を大事にします。法、刑罰を重んじますから、それは正しいのですが、行き過ぎると、法律に引っかかりさえしなければ、何をしてもいいという、とんでもない考え方になりかねないところがあります。

一方、どうすればいいかという、孔子はこう言っています。

「之を道くに」行政を行う場合に、「徳を以てし」法律や制度を振り回さず、モラル、道徳でいこうということです。

強制ではない。こう守っていこうというルール、習慣を中心にする。その道徳を適用して、治安維持は「礼」を使いましょうということです。この「礼」は習慣法といってもいいと思います。

これは長く生活していくうちに、人々が身に付けていくものです。

例えば、人々が部屋に集まって座る場合、座席の順番について儒教では非常にやかましく言います。座席の順番のルールを決めておりますので、それにしたがったらよろしいと。

ルールにしたがっていくことが正しいと分かれば、「恥有りて」心から、良くないことに恥じるようになる。そうすれば、それは正しい在り方になると、こう言っています。

つまり、法か道徳かといった場合に、道徳でいこうと孔子は言います。

今日でも、法律家はこう言います。罪刑法定主義でいろいろな刑罰を決めますが、一方、自然法というものがあると。

これはどちらかといえば、道徳に近いものです。法律家においても自然法は大事であるとされています。ただ、儒教はそれを徹底します。別のことばでいえば「礼」を重視する。このことを言ってきたわけです。

次の文章を読んでみましょう。

「子曰く、^{しいわ}訟^{うった}えを^き聴くは、^{われな}吾^{おひと}猶^{ごとし}人のごとし。必^{かなら}ずや^{うった}訟^なえ無^しから使^しめんか」(顔淵第十二)

「訟え」争い事がある。「聴く」それを判断する。

何かトラブルがあり、孔子は、答えを求められて解決策を出すことに関して。

「吾」私は。孔子のことです。「猶人のごとし」普通の人と同じであると言いました。

では、自分、孔子の特徴は何か、自分は「必ずや訟え無から使めんか」。

そのようなトラブルが起こらないようにする、それは、私はできると、こう言いました。

普段、道徳的な在り方をきちんと守っていれば、トラブルが起こったり、訴訟があったりする
ことはない。

多くのトラブルというのは、儒教文化圏では大体話し合いで解決します。

しかし、欧米社会では裁判沙汰になることが多い。法に訴えることが多い。それは今日でもそ
ういう流れはあるかと思います。

今回は「自分の幸せだけでいいのか」について第二回をお話ししました。